

かささぎ 通信 第126号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 6月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」



図：「簪」登場人物関係図

二〇一三年五月の「森三郎の作品を読む会」では「簪（かんざし）」
『つぐつぐの謎』[1943.8] 所収作）を読みました。

「簪」は『赤い鳥』の読者より少し上の少年少女を対象にした作品だと思われまます。名主の家の娘・お静が、山一つ挟んだ隣村の名主の息子の所にお嫁入りするまでの成長の話です。

山を挟んだ隣村の源四郎と作兵衛は子どもが生まれる前から子どもたちを将来の許嫁（いいなずけ）とする約束をします。ところが、源四郎の子どもは月食の晩に生まれたので、「家を滅ぼす」という先祖からの言い伝えにより、妻にも内緒で涙を飲んで山へ捨てられます。源四郎はちようど生まれたばかりの小作人の子を代りに金づくで貰い受け、我が子として育てます。一方、捨て

られた子どもは隣村の庭師夫婦に拾われ庄吉と名づけられ大切に育てられます。

庭師の子ども庄吉は大きくなると、名主作兵衛の娘お静とままごとの夫婦になって遊びます。その後、もうままごと遊びの頃のように親しく話さなくなっても、二人の心には親しい気持は消えずにいました。

作者はお静の成長を琴の練習曲の変化で表しています。庭師の庄吉が木の上から琴の調べを聞く姿と同じような表現が三郎作品にありました。「猿」（『赤い鳥』一九三三年三月号）の主人公が木の上でお屋敷の奥方の琴の音を聴き、自分の住む世界と違う世界への憧れを抱く場面でした。「簪」の二人の主人公の場合もむしろ二人の距離が遠ざかる象徴として琴の

曲が流れています。

お静は親同士の約束に従って、隣村の名主の息子源之助の所にお嫁に行きます。この約束の真の相手は実は庭師の庄吉であることは、登場人物の誰も知る所ではありません。知っているのは作者と読者の私たちだけです。

元々は家を守るために子どもを手放しておきながら、形だけは親同士の「約束」を守った名主の源四郎の行為から起きた話です。庄吉とお静の心に自然に湧き出した相手を思う気持ちを成就させてやる術は無かったのでしょうか。しかし、そうすれば無理に身代りにされた源之助はどうなるのでしょうか。作者自身もそのようなどうしようもない思いを解決できず、嫁入りのお静の髪に刺した簪の抜け落ちるかすかな響きを、余韻として残すしかなかったのでしょうか。

三郎さんがこの作品を書いたのは、戦争中の学徒動員の頃です。人生の夢や約束などは簡単に裏切られる時代でした。「自分の幸せは自分でつかまなければと改めて感じた」「不条理な話からむしろ、自分で考えるきっかけを作る話になるのではないか」等の感想が出ました。

この「簪」と同じ様に親同士の約束で結婚が決まっていた男の子が戦争で人生が一変してしまう話を、兄の森銃三が書いています。「うらおもて」（『森銃三遺珠Ⅱ』研文社）で、これは一九四六年十二月に発表されていますから、戦後の作品です。中国地方のある城下町が兵乱に巻き込まれ、一人の商人がその中で大事な一人息子を見失ってしまっています。その子を探す目的で行商人となった父親が、息子と同年くらいの子を遠国で貰い受けて帰郷します。その子を約束の息子に仕立て結婚の日取りも決まった頃、本当の息子が帰ってきます。相手方の母親の知恵分別で、誰も傷付かずに二組の若い夫婦が誕生する話です。二作の書かれた時代の空気感の違いを感じる結末です。

次回予定 二〇一三年七月十四日（金）午後一時半～三時半
「桃太郎の夢」「帰らなかつた桃太郎」『つぐつぐの謎』[1943.8] 所収作）